区分・種別	重要文化財(建造物)		
名　　称	いしてじさんじゅうのとう 石手寺三重塔　1基　　附　棟札1枚		
所　在　地	松山市石手		
所　有　者	石手寺	管 理 団 体	
指定年月日	明治40年5月27日		
解　　説	三重塔は二王門（国宝）をくぐった右手にある。三間三重の塔で、本瓦葺である。高さは24.1m、軒は３層とも二軒（ふたのき）、平行繁垂木（しげだるき）である。各重とも円柱上に和様三手先（みてさき）の組物を置き、中備（なかぞなえ）にはそれぞれ間斗束（けんとづか）を備えるが、初重のみはその束（つか）を欠く。初重には切目縁（きりめえん）を、二・三重には縁・組高欄（くみこうらん）をめぐらせる。 初重の内部には四天柱（してんばしら）を立て、その奥側の柱間に来迎壁（らいごうかべ）を設け、壁の前面に須弥壇（しゅみだん）を置く。内壁には真言宗八祖の図が、来迎壁には曼荼羅が、四天柱・格天井にもそれぞれ彩色が施されているが、褪色剥離が見られる。須弥壇には釈迦三尊の像を祭る。九輪・水煙を支える心柱は、三・二重の中心を貫通し、さきの四天柱の頂部に架けられた梁で受けられる。これは平安時代末期に始まり、鎌倉時代の塔に多く用いられた構造である。全体の容姿はよく均整が取れ、鎌倉時代の特色を伝える建物である。		